

Consideration of the results of an investigation in elementary and junior high school students' "power with which child lives" in the prefectural area A

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 百合子, 山口, 恵, 入野, 規子, 小野坂, 益成, 大澤, 優子, 大津, 聡美, 藤川, 君江, 久松, 桂子, Shinohara, Yuriko, Yamaguchi, Megumi, Irino, Noriko, Onosaka, Masunori, Osawa, Yuko, Otsu, Satomi, Fujikawa, Kimie, Keiko, Hisamatu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000061

資 料

A 地域における小中学生の「子どもの生きる力」領域における
調査結果の考察

Consideration of the results of an investigation in elementary and junior high school students' "power with which child lives" in the prefectural area A

篠原百合子, 山口 恵, 入野 規子, 小野坂益成, 大澤 優子,
大津 聡美, 藤川 君江, 久松 桂子

Yuriko Shinohara, Megumi Yamaguchi, Noriko Irino,

Masunori Onosaka, Yuko Osawa, Satomi Otsu, Kimie Fujikawa, Keiko Hisamatu

要 旨

第15期中央教育審議会の提唱するところの「生きる力」は、その後の時代と社会の変化に対応する形で変容を遂げてきた。2006年の教育基本法の改正では、新たに「学校・家庭・地域住民等の相互の連携協力」が規定され、これを踏まえ、2008年に改正社会教育法では第3条3項に国及び地方公共団体が社会教育行政を行うに当たって「学校、家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することに努める」の規定が新たに加えられ¹⁻³⁾、21世紀社会に「生きる力」を全ての子どもたちが育てることが学校教育の課題であるとされてきた。次世代を担う子どもが現代社会の中で成長を遂げていくためには、社会への適応力・態度・価値観・自己成長力の4つの領域での資質、能力を育む事が重要である文部科学省は強調している¹⁾。そのためには、国際化、情報化を広く学び自ら一生学び続ける意欲と力を身につける事が求められる。一方、他者との共生、異質なものへの受容、社会との調和が必要とされている。その中では、知識のみならず、問題解決の結果を教える授業から実際に子どもが自ら問題解決する学習、机上の学習から体験を通じた学習へ、学校で完成する学習から生涯にわたる学習への移行が必要となる。今回、S県2校の小学6年生、中学3年生合計272人を対象に、「生きる力」4つの領域に沿った調査を実施した。その結果について述べる。

キーワード:

緒 言

「生きる力」は、中央教育審議会の答申に初めて登場したのは、1996年の答申、「21世紀に展望した我が国の教育のあり方」においてである。生きる力という言葉は、1996年に初めて登場したのではなく教育現場では度々用いられていた。これらの背景には諸外国の動向も関与している¹²⁾。諸外国では、同様に未来に生きる子どもに付けてほしい力としてイギリスやカナダでも用いられている。イギリスでは2001年から施行された新しいナショナルカリキュラムにおいて「キースキル」と呼ばれる問題解決的な学力の育成を明記している。カナダでは行政と大学、企業が共同研究を行い21世紀型の学力の育成に力を注いでいる。一方、日本においては、第15期中央教育審議会の答申において、社会への適応力・態度・価値観・

自己成長力の4つの領域について育成することを強調された。今回、S県O市における小学6年生、中学3年生総計272人を対象に、中央審議会の提唱するところの「生きる力」に掲げられている内容の能力とされる、社会への適応力・態度・価値観・自己成長力の4つの領域に沿ったアンケート調査を実施した。その結果、小中学生時代を成長する過程で子どもは様々な教育支援を受け成長することが分かった。これらの結果は、子どもを支援する様々な基礎資料として活用できる。

I. 研究方法

1. 調査対象

S県内A市公立小中学校各1校に通う生徒
A小学校6年生121人

H 学校 3 年生 151 人

2. 倫理的配慮

- 1) 調査対象となる小・中学校を管轄する教育委員会に出向き、教育長、教育委員に対して研究の趣旨、調査内容、倫理的配慮、研究結果の開示方法について説明を行った。
- 2) 調査対象となる、小学校長、中学校長の同意を得て教職員会議にて対象となる学年担任となる教員に対し書面と口頭で説明を行い了承を得た。その後、PTA 委員会の場で保護者への同意を得る方法について説明を行い同意を得た後、アンケート調査を実施した。
- 3) 子どもへ実施する際は、クラス担任から生徒への説明を依頼し実施した。

子どもに対しては、分かりやすい説明を心がけ、解答は無記名で良く答えたくない内容については無回答で良い事などを説明していただき、回収を依頼した。

4) 調査内容

調査内容は、「新しい学力を育む研究会」を主宰する大阪教育大学田中博之氏が監修する¹⁾「生きる力」4 領域の質問項目を参照し、評価項目を作成、質問紙を作成した。

小学 6 年生は 4 項目 22 の質問内容、中学 3 年生は 7 項目 43 の質問内容を作成した。

これらの質問内容は以下の領域を網羅している。

- ①領域 1：調査研究力、コミュニケーション力、情報活用力
 - ②領域 2：社会への適応力
 - ③領域 3：態度・価値観：共生的態度・自律的態度
 - ④領域 4：自己成長力：自己認識力、行き方への構想力、この 4 つの領域を基に質問紙を作成しアンケートを実施した。小学 6 年生は 22 項目、中学 3 年生は 42 項目の調査内容を作成し全て 2～5 件法で回答する方法とした。
- 5) 本研究は、明星大学人文学研究科教育学専攻倫理委員会の承認を得て実施された。

II. 結果

結果の表記は各質問領域の一部を表記し、質問

内容を【 】、解答を「 」で記す。記載はその代表的な回答を記述する。

1. 小学 6 年生における調査結果 (表 1)

- 1) コミュニケーション能力は【初めて会った人でもきちんと会話ができる】では、「いつでもできる」40 人、「ときどきできる」78 人を合わせると 118 人 (94%) となっている。他の項目では「いつでもできる」は 30% 前後と低く、「時々できる」が高いことから、小学校 6 年生の捉える自己のコミュニケーション能力は決して高くないことが分かる。しかし、【人は全て 1 人の人格を持った尊い存在だと思う】は、「いつも思う」50 人、「時々思う」57 人とほぼ同数であり子どもの他者を尊重する力が備わっていることが分かる。
- 2) 協調性では、【自分の意見を相手に伝えるときは相手の考えも参考にする】は「いつもできる」51 人、「時々できる」66 人となっている。【人と協力しあい意見交換をすることができる】は、「いつもできる」29 人、「時々できる」77 人であった。人と強調するには、相手の考えを尊重しながら自分の意見を述べることの重要性を理解する力が育っている。
- 3) 情報活用力では、【テレビや新聞で最近の社会の出来事を良く知っている】は、「良く知っている」28 人、「知っている」77 人であった。【自分の住んでいる地域の自然や文化について知っている】は、「良く知っている」40 人、「知っている」62 人となっている。小学校 6 年生の結果からは、情報活用力については、テレビや新聞などメディアを通じて社会の出来事を知ることが得意ではなく地域の文化の継承に関連して様々な活動が学校を通じて行われているがより幅広く知っているとは言い難い結果となっている。
- 4) 態度・価値観・自己認識力では、【自分から進んでお年寄りや障害のある人に対し、声をかけ、手を差し伸べることができる】は「いつもできる」は 13 人、「時々できる」は 70 人となっている。【自分のことが好きである】は、「とても好きだ」13 人、「好きだ」33 人となっている。【自分は周りの人から十分に認められていると感じている】は、「いつも感じている」は

2人、「時々感じている」は33人となっている。この項目では、全体的に低い結果となっており、小学校6年生ではこれらの項目では十分に育っていないことが分かる。

5) 生き方への構想力では、【大人になったら是非就きたい仕事がある】は、「ある」が92人と高い結果となっている。【将来こんなおとな

になりたいといった理想像がある】は、「ある」90人と高い。しかし、【自分の夢を叶えるために誰か大人へ相談をする】は、「特にしていない」は85人と高い。小学6年生では、将来の展望については具体的に考えてはいても、それを具体的に叶えるための行動は十分ではないことが分かった。

小学6年生への調査結果(表1) 対象者数125名

	質問項目 n (回答総数)	回答内容	回答数 (比率)	
コミュニケーション能力	始めて会った人でもきちんと会話ができる n=125	いつでもできる	40 (32.00)	
		時々できる	78 (62.40)	
		できない	7 (5.60)	
	自分の考えや意見を、相手に分かりやすく伝えることができる。n=96	いつでもできる	13 (13.54)	
		時々できる	72 (75.00)	
		できない	11 (11.45)	
	意見の違う人とも協力することができる。n=125	いつでもできる	25 (20.00)	
		時々できる	70 (56.00)	
		できない	30 (24.00)	
	人は全て1人の人格をもった尊い存在だと思う。n=122	いつも思う	50 (40.98)	
		時々そう思う	57 (46.72)	
		思わない	15 (12.29)	
協調性	人と協力しあい意見交換することができる n =122	いつでもできる	29 (23.77)	
		時々できる	77 (63.11)	
		できない	16 (13.11)	
	自分の意見を相手に伝えるときは相手の考えも参考にする。n=122	いつでもできる	51 (41.80)	
		時々できる	66 (54.09)	
		できない	5 (4.09)	
	気持ちが通じ合うためには、互いの気持ちを確認することが大切だ。N =125	いつでもできる	45 (36.00)	
		時々できる	71 (56.80)	
		できない	9 (7.20)	
	情報活用力	テレビや新聞での最近の社会の出来事を良く知っている。N125	良く知っている	28 (22.40)
			知っている	77 (61.60)
			知らない	20 (16.00)
水や空気、ゴミなどの環境問題について知っている。N125		良く知っている	36 (28.80)	
		知っている	74 (59.20)	
		知らない	15 (12.20)	
健康を守るためにどうしなければいけないか知っている n123		良く知っている	35 (28.45)	
		知っている	82 (66.66)	
		知らない	6 (4.80)	
自分の住んでいる地域の自然や文化について知っている n125		良く知っている	40 (32.00)	
		知っている	62 (49.60)	
		知らない	23 (18.40)	
態度・価値観・自己認識力	クラスの友達1人1人の良いところを探そうとし、つきあう。N125	いつでもできる	19 (15.20)	
		時々できる	86 (68.80)	
		できない	20 (16.00)	
	点字や手話など障害のある人に対し、手助けできる内容を具体的に知っている n =125	良く知っている	22 (17.60)	
		知っている	80 (64.00)	
		知らない	23 (18.40)	
	自分からすすんでお年寄りや障害のある人になりたいし、声をかけ、手をさしのべることができる n =125	いつでもできる	13 (10.40)	
		時々できる	70 (56.00)	
		できない	22 (17.60)	
	学校や社会のルールを守り、マナーを大切にしている n =113	いつでもできる	18 (15.92)	
		時々できる	70 (61.94)	
		できない	25 (22.12)	
イライラしているときでも、周りの人の意見を聞くことができる n =121	いつでもできる	9 (7.43)		
	時々できる	61 (60.39)		
	できない	51 (42.14)		
自分の事が好きである。n=101	とても好きだ	13 (12.87)		
	好きだ	33 (32.67)		
	分らない	55 (54.45)		
自分は周りの人から十分に認めて貰っていると感じている n =122	いつも感じている	2 (1.63)		
	時々感じている	33 (27.04)		
	分らない	87 (71.31)		
生き方への構想力	大人になったら、是非つきたい仕事がある n =124	ある	92 (74.19)	
		特にない	32 (25.80)	
	将来、こんな大人になりたいといった理想像がある n =125	ある	90 (72.00)	
		特にない	35 (28.00)	
	自分の夢を叶えるために誰か大人へ相談をする n =125	相談している	40 (32.00)	
		特にしていない	85 (68.00)	
将来の夢を叶えるために、今から努力をしていることがある。N =125	ある	84 (67.20)		
	特にない	41 (32.80)		

2. 中学3年生における調査結果

- 1) 授業での自己学習や調査研究力では、【不明な事柄や興味があることについては、自分でより深く調べ知識を得ようと工夫をしますか】では、「いつもしている」は29人、時々しているは100人であった。【体験したことなどで興味があることは詳しく調べてみようとする方ですか】では、「いつも調べる」57人、「時々調べる」59人とほぼ同数となった。
- 2) インターネットの活用力では、【インターネットで目的に合った情報を集めることができますか】では、「いつもできる」90人、「できる」40人」といつもできるが高い数値となっている。【インターネットで検索した情報が正しいかどうかを確認できますか】では、「いつも確認する」37人、「時々確認する」80人と情報が正しいかどうかを検索することは不得手であることが分かる。
- 3) 友人との交流の持ち方では、【自分の考えや意見を相手に分かりやすく伝えることができますか】では、「いつもできる」は49人、「できる」は74人となっている。一方【意見の違う人とでも協力をすることができますか】では、「いつも協力できる」72人、「協力できる」54人となっている。中学生では、小学生よりも協調性に関する項目では肯定的な評価が得られている。
- 4) 社会情勢や暮らしについては、【テレビや新聞で報道されているニュースは興味を持って見えますか】では、「見ている」76人、「時々見ている」52人であった。【現代はストレスの多い社会であると思いますか】では、「いつも思う」76人、「時々思う」59人となっている。一方、暮らしに関する質問での解答では全体的に低い結果となっている。中学生では、社会情勢に目を向けつつある社会化された存在へと成長しつつあるが、自己の健康を守る事柄では

興味を持って行動できない実態が浮き彫りとなっている。

- 5) 地域社会への貢献については、【点字や手話、車いす介助など、障害を持つ人を手助けする方法を知っていますか】では「良く知っている」18人、「知っている」36人となっている。【自分から進んでお年寄りや障害を持つ人に対して手を差し伸べられますか】では、「いつもできる」15人、「時々できる」86人となっている。【将来は人の為に役立つ大人になりたいと思えますか】では、「思っている」68人、「時々思う」56人となっている。障害のある人に対して手を差し伸べることに関連した質問内容では、肯定的な回答は低い、社会で役に立つ存在として成長することについては自己肯定感が高い。
- 6) 将来への夢については、【将来就きたい仕事や夢を持っていますか】では、「持っている」103人、「なんとなく持っている」32人であった。【将来の夢に対して今から努力していることがありますか】では、「いつも努力している」69人、「たまに努力している」65人となっている。中学生では、自身の将来の目標に対して学習などを通じて夢に向かっていく結果が伺える。
- 7) 生徒自身のことについては、【自分のことが好きである】では、「とても好きだ」16人、「好きだ」36人となっている。【自分は周りの人から認められていると思いますか】では、「いつも認められている」13人、「認められている」73人となっている。【友達との関係で悩んだことはありますか】では、「いつも悩む」は20人、「時々悩む」100人となっている。【友達との関係で悩んだ時に相談をする相手はいますか】では、「いつもいる」81人、「いる」10人となっている。【対人関係は苦手なほうですか】では、「苦手ではない」22人、「時々苦手だ」22人となっている。

中学生アンケート結果(表2) 対象者数=151人

	質問項目 n(回答総数)	回答内容	回答数(比率)
授業での自己学習や調査研究力	不明な事柄や、興味があることについては、自分でより深く調べ、知識を得ようと工夫をしますか n=151	いつもしている	29 (19.20)
		時々している	100 (66.22)
		していない	22 (14.57)
	苦手な授業や困難な課題を達成するためには、進んで努力をし、チャレンジしようという気持ちがありますか n=151	ある	45 (29.80)
		どちらといえない	79 (52.31)
		ない	27 (17.88)
	体験したことなどで、興味があることは、詳しく調べてみようとするほうですか n=141	いつも調べる	57 (40.42)
		時々調べる	59 (41.84)
		調べない	25 (17.73)
	調べて分かったことをまとめてみることは好きですか n=141	とても好きだ	41 (29.07)
		好きだ	55 (39.00)
		好きではない	45 (31.91)
インターネットの活用力	インターネットで目的に合った情報を集めることができますか n=151	いつでもできる	90 (59.60)
		できる	40 (26.49)
		できない	21 (13.90)
	電子メールなどで、お友達などと交流をしていますか n=146	いつもしている	94 (64.38)
		時々している	11 (7.53)
		していない	41 (28.02)
	コンピューターを使ってレポートをまとめることができますか n=131	いつでもできる	48 (36.64)
		時々できる	53 (40.45)
		できない	30 (22.90)
	インターネットで検索した情報が正しいかどうかを確認できますか n=151	いつも確認する	37 (24.50)
		時々確認する	80 (52.98)
		しない	34 (22.51)
友人との交流の持ち方について	自分の考えや意見を、相手に分かりやすく伝えることができますか n=141	いつでもできる	49 (34.75)
		できる	74 (49.66)
		できない	18 (12.08)
	意見の違う人とでも、協力をできますか n=149	いつも協力ができる	72 (48.32)
		協力できる	54 (36.24)
		できない	23 (15.43)
	初対面の人と話す時は、相手の話にきちんと耳を傾けますか n=150	いつも聴く	105 (69.53)
		時々聴く	28 (18.66)
		聴かない	17 (11.33)
	クラスでは意見が違う人とでも、話すように努力をしていますか n=151	いつも努力をしている	56 (37.08)
		時々努力をする	71 (47.01)
		しない	24 (15.89)
家では両親と進路のことなどについて良く話し、相談をしましたか n=134	いつも相談をする	72 (53.73)	
	時々相談する	62 (46.26)	
	見ている	76 (53.90)	
社会情勢や暮らしについて	テレビや新聞で報道されているニュースは興味を持って見えていますか n=141	時々見ている	52 (36.87)
		見ている	76 (53.90)
		見ていない	13 (9.21)
	水や空気、ゴミ問題など、環境問題に興味がありますか n=142	とても興味がある	33 (23.23)
		時々興味がある	96 (76.60)
		興味はない	18 (12.67)
	現代はストレスの多い社会であると思いますか n=142	いつも思う	76 (53.52)
		時々思う	59 (41.54)
		思わない	7 (4.92)
	最近の社会面での事件等について、家族や友達と話し合ったりしますか n=151	いつも話し合う	28 (18.54)
		時々話し合う	91 (60.26)
		話し合わない	32 (21.19)
自分の健康を守るために気を付けることを知っていますか n=142	良く知っている	65 (45.77)	
	いくらか知っている	68 (47.88)	
	知らない	19 (13.38)	
夜は、何時に就寝しますか n=149	22時前	12 (8.05)	
	24時前	72 (48.32)	
	24時以降	65 (43.62)	
町の文化や人々の暮らしについて関心を持って調べたことがありますか n=143	いつも調べる	27 (18.88)	
	時々調べる	63 (44.05)	
	調べない	53 (37.06)	

中学生アンケート結果 (表3) 対象者数 151 人

	質問項目 n (回答総数)	回答内容	回答数 (比率)
地域社会への貢献についてお聞きします	点字や手話、車いす介助など、障害を持つ人を手助けする方法を知っていますか n =142	良く知っている	18 (12.67)
		知っている	36 (25.32)
		知らない	88 (61.97)
	自分から進んでお年寄りや障害を持つ人に対して手をさしのべられますか n =133	いつでもできる	15 (11.27)
		時々できる	86 (64.67)
		できない	32 (24.06)
	町の地域の活動や行事に進んで参加をしていますか n =140	いつも参加している	23 (16.42)
		時々している	86 (61.42)
		していない	31 (22.14)
	将来は人の為に役立つ大人になりたいと思っていますか n =151	思っている	68 (45.03)
時々思う		56 (37.08)	
思わない		37 (17.08)	
いつもそうだ		43 (30.06)	
やり始めたら、最後までやり抜く方だ n =143	時々そうだ	78 (54.54)	
	違う	22 (15.38)	
	いつも大切にしている	50 (33.55)	
学校や社会のルールを守って、マナーを大切にしている n =149	時々気にしてる	90 (60.40)	
	気にしない	9 (6.04)	
	いつでもできる	16 (10.73)	
イライラしているときでも、周囲の人の意見を冷静に聞くことができますか n =149	時々できる	90 (60.40)	
	できない	43 (28.85)	
	もっている	103 (68.21)	
将来への夢についてお聞きします	将来就きたい仕事や夢をもっていますか n =151	なんとなくもっている	32 (21.19)
		考えたことがない	16 (10.59)
		いつも努力している	69 (48.59)
	将来の夢に対して、今から努力をしていることがありますか n =142	たまに努力する	65 (43.04)
		努力はしていない	8 (5.63)
		いつも話している	42 (27.81)
	家族や友人と、将来の夢や目標に向かって努力をしていることを話します n =151	たまに話している	62 (41.05)
		話をしない	47 (31.12)
		分かっている	56 (37.08)
	自分が将来への夢を実現するために何をすべきか分かりますか n =151	なんとなく分かる	69 (45.69)
分からない		27 (17.88)	
いつも関わってくれる		51 (37.22)	
周囲の大人や教員は、自分が考えている将来への夢に対し、好意的に関わってくれましたか n =137	時々関わってくれる	79 (57.66)	
	関わってくれない	7 (5.11)	
	とても好きだ	16 (12.21)	
生徒自身のことについての質問	自分のことが好きである n =131	好きだ	36 (27.49)
		好きではない	79 (60.30)
		いつも認められている	13 (8.60)
	自分は周りの人から認められていると思いますか n =151	認められている	73 (48.34)
		認められていない	69 (45.69)
		良く分かっている	39 (25.82)
	自分に出来ることや向いていることは何かを知っていますか n =151	分かっている	75 (49.66)
		分からない	37 (24.50)
		いつも悩む	20 (13.24)
	友達との関係で悩んだことがありますか n =151	時々悩む	100 (66.22)
悩まない		31 (20.52)	
いつもいる		81 (57.42)	
友達との関係で悩んだときに相談をする相手がありますか n =141	いる	10 (7.09)	
	いない	50 (35.46)	
	苦手ではない	22 (21.78)	
対人関係は苦手な方ですか n =101	時々苦手だ	36 (35.64)	
	苦手だ	43 (42.57)	
	いつも探そうとする	19 (13.01)	
クラスの友達1人1人の良いところを探そうとしますか n =146	時々探そうとする	100 (68.49)	
	探さない	27 (18.49)	

Ⅲ. 考察

1. 小学生における結果の考察

1) 他者と強調する力

コミュニケーション能力の質問項目では、肯定的、否定的な回答がほぼ同数の回答が得られている。コミュニケーションは対人関係の基本であり、自己表現するために不可欠な要素でもある。小学校高学年からこれらの能力が養われていると言える。また、協調性の質問項目では、他者を尊重しつつ自分の意見を伝えることができると答えた者は半数程度となっている。人と強調するためには、相手の考えを尊重しながら自分の意見を述べることの重要性を理解する力が育つ必要がある。小学校高学年の時期では、物事のある程度対象化して認識することができるようになる⁵⁾。自己と他者との間に距離をおいた関わりができるようになり、知的な活動においてもより分化した追求が可能となる。また、集団の規則を理解して、集団活動に主体的に関与し、遊びなどでは自分たちで決まりを作り、ルールを守るようになる一方、ギャングエイジとも言われるこの時期は、閉鎖的な子どもの仲間集団が発生し、付和雷同的な行動が見られる。抽象的な思考への適応や他者の視点に対する理解、自己肯定感の育成、自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養、集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成、体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくりが必要となる^{7,10)}。これら社会とのつながりがより強固となり、自らの自己肯定感が促進され発達が促されるような働きかけが必要となる。

態度・価値観・自己認識力の項目では、全体的に低い結果となっており、思春期に差し掛かった子どもの揺れ動く自己認識が成長途上にあることが分かる。他者を尊重し、他者から必要とされる大人へと成長するためには、これら自己肯定感を育む関わりが、学校教育のみならず、家庭や、地域社会でも育む環境作りが必要と考えられる⁹⁾。

2) 情報を活用する力

情報活用力の項目ではテレビや新聞などメディアを通じて社会の出来事を知ることは9割以

上が肯定的な回答をしている。地域の文化の継承に関しては、様々な活動が学校を通じて行われ課外活動や子ども活動を通じて全学年に継承されている。また、高度情報化社会に必要とされる情報活用力は、コンピューターを普段の生活の中で主体的に使いこなす力がますます必要とされる。そのためには学校における情報教育の重要性が一層強く認識されるようになってきている。中学入学前の学童期にある子どもは、身体的な発達のピークにあり、第二次性徴が起これり男女ともに心身不安定な時期に突入する。

小学校時代のギャングエイジから脱却して、より深い部分で互いの将来を語り合い、部活動や課外活動を通じて成長し合う重要な転換時期にある。これらの発達課題を認識し、子どもの価値観・態度がより社会化されるように働きかける必要がある。

3) 生き方への構想力

生き方への構想力の項目では、将来就きたい仕事や、理想の大人像に関する質問では概ね肯定的な結果が得られている。小学6年生では、将来への展望については具体的に考えていることはあっても、それを具体的に叶えるために行動することはしていない現状が分かった。家庭環境と子どもの学力が関係していることは、これまでの多くの研究で実証されてきた。保護者のバックグラウンドが何らかの形で子どもの学習や将来への夢に影響を与えることは推測することができる。しかし、子どもらは学校など自分を取り巻く多くの環境から刺激を受け成長を遂げていることを考えると、学校活動が自分の将来の夢を叶えるような場であることの保証と、それら自己認識力が高められ、描いた夢を達成できるような支援のありかたが求められる。

2. 中学生の結果の考察

1) 社会情勢、社会貢献に関する理解

社会情勢や暮らしについての項目では、テレビや新聞で報道されているニュースなどに関しては高い関心を持っている結果となっている。中学生は、ニュースに関心を持ち社会の中で起こっている出来事に目を向け、自らの価値観を成長させ、善悪の判断の基準とすることを学ぶ。一方、これら、社会の中で起こっているニュー

ス等から自身がいずれ身を置く大人社会に対して、自分の状況からもストレスを感じている存在と考えられる。成長し、将来への夢を育む過程はストレスの連続である。ストレスに対して、立ち向かっていけるような強い自己を育む支援が家庭、学校、地域社会で求められる。障害のある人に対して手を差し伸べることに関連した質問内容では、肯定的な回答は低いが、社会で役に立つ存在として成長することについては自己肯定感が高い。社会貢献については、高齢者や障害者に関する配慮の必要性については、十分な認識を持ってはいない。地域社会は、子どもが遊びや活動を通じて仲間作りをする場であると同時に、行動への参加、住民との交流を通じた社会性や郷土愛を育む場として重要な役割を担っている。地域社会への帰属意識や連帯感が希薄になり、地域の青少年は地域で育むと言った意識や活動への関心が薄れ、地域の教育力は低下していると言われる。他者への関心の低下や、自分の子どもが注意されることを快く思わない風潮など、大人が注意しにくい状況もある。地域は子どもの生活の重要な基盤であり、豊かな人間性を育む絶好の場所である。地域社会がそのような役割を果たしていくためには、子どもたちが安心して遊び、生活できる安全な地域作り、福祉関係機関や各自治体などと連携して進めていくことが必要と考えている。現代は子どもったいが近所の大人や異年齢の子どもと関わる機会が少なくなっており、子どもが他者と交流できる場を意図的に作り出していく必要がある^{10,11)}。そのためには学校の様々な活用が役立つ。主要な生活の場である学校では、放課後や週末などにおける活用も可能であり、子どもの体験活動の提供や居場所作りといった、ふるさとの自然や伝統、文化の良さを実感させることは地域の果たす大きな役割の1つである

2) 学習への取り組みや情報を活用する力

授業での自己学習や調査研究力の項目では、興味関心があること、体験したことについては、半数が肯定的な回答をしている。中学3年生は受験を控えた年齢であり、調査を行った時期が1月ということも関連していると考えられる。また、思春期は自己肯定感が成長する時期であり、周囲の客観的評価に自己評価がマッチして

いないことも考えられる。

一方インターネットを活用した授業に関する質問項目では、全ての項目で「いつでもできる」「時々できる」を合わせると130人86%を占めている。これらの結果が占めすのは、めまぐるしく変化する社会環境は、青少年の意識や行動、人間関係に大きな影響を与えている。中での、近年のインターネットや携帯の急速な普及に夜手情報の氾濫と言える状況にあることから、メディアを通じた情報の氾濫や現実感の低下が起きている。ネット社会にあってセキリュテイの管理は必要不可欠なものであるが、中学生にあってはこれらを怠っている現状がある。青少年の情報選択や判別する能力を育成することが必要と考えられる¹⁷⁾。

3) 自己肯定感と将来への夢

自己肯定感に関する項目の結果では、自分のことを好きと答えた者は40%と低いが思春期・青年期の成長発達課題であるアイデンティティの確立が育つ時期でもあり、概ね先行研究と同じ結果となっている。身体的な二次性徴とこれらこころの成長発達が相対的に進まず低い結果となっていることが推測される。学校教育の場で、いろいろな違った意見に触れ、尊重しお互いに議論を交わす中で本当に他者を分かるという体験が可能となる。自分の意見を相手に押しつけるのではなく、相手を尊重し他者の意見を聴き、その中で自分の考えを主張できるという体験を通して新たな自己に気づき、成長が促進される。学校・地域社会・家庭が協力し合い子どもを育てることが重要であり、そのための施策作りが必要である。教育答申は、生きる力を育てるためには、個性尊重が重要であると述べている。小・中学生が生きる個性尊重とは、自己責任と他者との共生が両立することによって達成される。生きる力を育てるために必要とされる内容として、自己表現をし、相手との関係性を築くことができるコミュニケーション力、問題解決や自己実現するために必要な知識や情報を主体的に収集し、多角的な判断を行うことのできる学び取る力、学んだものを生活に生かしていくことのできる実践力が必要となる^{5,7)}。

3. A市における小・中学生の生きる力

「生きる力」の概念は、「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」第15期中央審議会第一次答申で初めて登場した。答申では「生きる力」を次の3つの力を構成要素とする¹²⁾。

①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、熱りよく問題を解決する資質や能力②自らを律しつつ、他人と強調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性③たくましく生きるための健康や体力を指す。何故、現代社会に「生きる力」が求められているのか。現代社会は物と情報の氾濫、技術革新、価値観の多様化が進み、その結果、子どもを取り巻く環境や教育に様々な問題が生じている。その結果子どもを取り巻く環境には問題が山積みである。従来の教育で教え込まれた学力、教育では対応しきれない。国際化や情報化が進み先行が不透明な社会で生きていくためには、自ら一生学び続ける意欲と力を身につけることが必要となる。今、学校は「生きる力」を求めて変化し続けている。学校で完成する授業から生涯に渡る学習への移行であると考えられる^{9,10)}。

IV. 結 論

1. S県、A市における小・中学生の調査結果からは家庭・地域・学校が丸となって子どもの教育支援に関わり、子どもが主体的に将来の夢を描いて努力する姿勢がある。
2. グローバル社会で活躍するための手段として小学校低学年より取り組んでいる情報活用に関する授業は、子どもがインターネットの活用などを通して情報活用する力を育てている。

V. 終わりに

本研究は1地域での結果であり、全体を論じるには情報が不足しているため今後の課題としていきたい。

VI. 文 献

1. 田中博之：ヒューマンネットワークを開く情報教育. 高陵社書店. 2000
2. 布村育子：「生きる力」の変容と教員養成の課題. 埼玉学園大学紀要第8号 P107～115
3. 坂本昇一：今なぜ「生きる力」なのか. 教育フォーラム第19号. 金子書房. 1996
4. 市川伸一：「学力論争」. ちくま新書. 2002
5. 米澤好史：子どもと向き合い生きる力を育てる育児と教育. 和歌山大学教育学部教育実践センター紀要 No10P1-15. 2000
6. 「新しい学力を育むための教育調査」の調査結果の概要ベネッセ教育開発センター
7. 坂野雄二・前田基成：セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房. 2002
8. 若年労働者の就業をめぐる諸問題日本労働年鑑 第74集. 法政大学大原社会問題研究所. 2004
9. 返田建：青年期の心理 教育出版. 1994
10. 福永安詳、高島秀樹：教育社会学. 明星大学. 2005
11. 服部祥子：生涯人間発達論から見た思春期、そして青年期. 医学書院. 2004
12. 文部科学省中央教育審議会スポーツ・青少年分科会（第36回）「子どもの意欲・やる気等の向上・低下に係る調査研究成果・事例の収集調査（調査結果の概要）. 2005

Consideration of the results of an investigation in elementary and junior high school students' "power with which child lives" in the prefectural area A

Yuriko Shinohara, Megumi Yamaguchi, Noriko Irino,
Masunori Onosaka, Yuko Osawa, Satomi Otsu, Kimie Fujikawa, Keiko Hisamatu

Abstract

"The power of living" which the 15th term Central Council for Education advocates has changed and improved its form, corresponding to subsequent time and change of society.

"Mutual cooperation between a school, a home, a local resident, etc." is newly prescribed by revision of the Fundamental Law of Education in 2006. Based on this, under the 3rd clause, 3rd article in the revised Social Education Law in 2008, the prescription that solidarity and cooperation between schools, homes and local residents etc. should be tried to accelerate was newly added^{1~3)}, and the task of school education was defined to get all the children grow "the power of living" of their own in the 21st century society. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology emphasize that it is important to nurture children's qualities and abilities in four domains of the social conformity power, the attitude, the sense of values, and self-growth potentiality so that children bearing the next generations can accomplish growth in the modern society¹⁾. For that purpose, while symbiosis with the others, acceptance of heterogeneous things, and harmony with society are needed, connotation and vigor to continue to study internationalization and computerization all the way of life in person are also called for. In the process, not only the knowledge of it, but switching is needed from class teaching the results of a problem solution to the learning that a child really solves the problem by oneself, from impracticable paper learning to the learning through the experience, from learning to be completed at school to lifelong learning. This investigation along the domain of four "the power of living" was conducted for 272 total third-year graders in two junior high schools in S prefecture. The following is the result of it.

Keywords: